

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720008

研究課題名(和文) ラテン・キリスト教世界とイスラーム世界の法概念の比較哲学的・比較宗教学的考察

研究課題名(英文) Comparative Study on the Concept of Law in Latin Christian World and Islamic World

研究代表者

山本 芳久(YAMAMOTO, Yoshihisa)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：50375599

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：現代の世界情勢において、キリスト教世界とイスラーム世界との文明間対話が焦眉の課題となっている。こうした課題に本格的に取り組むためには、政治や経済の動向の分析のみではなく、両文明の世界観の基礎を為している哲学・神学の次元での比較思想的考察が不可欠である。本研究においては、西洋中世とイスラーム世界の法概念を比較哲学的・比較宗教学的に分析することによって、両文明の知的営みの連続性と非連続性の双方を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The dialogue between the Christian World and the Islamic World is an urgent task for us today. To grapple with such a task, the analysis of modern politics and economy is not enough. The comparative study of philosophy and theology in the Christian World and the Islamic World is indispensable. In this study, both the similarity and dissimilarity between the legal thought of the Christian World and the Islamic World is made clear by the comparative study of the concept of natural law in Thomas Aquinas and the concept of law in Averroes.

研究分野：哲学、神学、宗教学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：哲学 倫理学 宗教学 比較哲学 一神教 トマス・アクィナス アヴェロエス 法哲学

1. 研究開始当初の背景

キリスト教とイスラム教の思想的交流に関する研究や比較思想的考察は、我が国においては、その必要性は様々な分野の研究者によって幅広く自覚されているが、いまだ本格的な研究は十分には行われておらず、全体的な見通しを与えてくれる書物も刊行されていないというのが現状である。このような現状を踏まえつつ、中世におけるキリスト教思想とイスラム教思想を比較哲学的・比較宗教学的に考察することが本研究の課題である。

「中世哲学」という言葉を聞いて多くの人が連想するのは「西洋中世哲学」である。すなわち、ラテン・キリスト教世界（現在の西ヨーロッパ）で展開していたいわゆる「スコラ哲学」のことである。「スコラ哲学」の本質は「信仰の理解(intellectus fidei)」という基本精神のうちに求められる。聖書に由来する「信仰」を、ギリシアに由来する哲学的な「理性」に基づいて可能なかぎり「理解」していく営みである。だが、このような営みは、実は、ラテン・キリスト教世界のみならず固有なものではなかった。

ラテン・キリスト教世界（カトリック）において中世哲学が展開していた同時代において、ユダヤ、イスラーム、ビザンティン（正教）などの他の一神教諸文明においても、それぞれの神学体系と古代ギリシア哲学（アリストテレスと新プラトン主義）との対話が徐々に進んでいた。三つの一神教の知的伝統が同一の基盤を有するようになったのは、セム的一神教としての共通性のみによるのではなく、ギリシア哲学の受容の共通性によるところが大きい。

こうした経緯の全体を視野に入れた中世哲学の全体像の再構築が世界的な規模で要請されている。我が国においては、西洋中世哲学・教父学・キリスト教神学に関しては数多くの研究が遂行されており、イスラーム哲学・イスラーム法に関する優れた専門家も存在している。だが、それらが孤立的な営みとなっていることに問題がある。

こうした状況を背景としつつ、本研究においては、ラテン語・ギリシア語とアラビア語という多様な言語で哲学的なテキストを読解しつつ一神教の比較哲学的考察を行うという研究課題に正面から取り組んでいる。

2. 研究の目的

本研究は、哲学史的・文献学的研究、法哲学的探求、文明論的対話という相互に関連した重層的な目的を有する。

第一に、哲学史的・文献学的研究としては、古代ギリシア哲学からイスラーム世界を経てラテン・キリスト教世界に至る哲学史的総体的な再検討に取り組む。このような目的を達成するために、ラテン語・ギリシア語とアラビア語・ヘブライ語という多様な言語で哲

学的なテキストを読解しつつ、一神教の比較哲学的考察を行う。

第二に、法哲学的探究としては、法の哲学的根拠づけという哲学の根本問題の一つに関して、比較哲学的・比較宗教学的観点から取り組む。

第三に、文明論的対話としては、或る意味では共通の地平の中で文明を形成して来たとも言える「中世哲学」の時代に注目することによって、キリスト教文明とイスラーム文明の連続性と非連続性の詳細を明らかにし、対話の可能性を新たな仕方で見出す。

3. 研究の方法

セム的一神教（ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教）において、それぞれの宗教の創設者（モーゼ、イエス、ムハンマド）は、立法者であった。彼らの立法した法は、宗教によって正当化されるような法ではなく、むしろ、それらの宗教を創設するような法であった。それゆえ、「法」概念の比較は、一神教の部分的構成要素の比較ではなく、それぞれの一神教の基本的な存立構造の比較にほかならない。

このような観点から、キリスト教世界の代表的な哲学者であるトマス・アクィナスとイスラーム世界を代表する哲学者であるアヴェロエスの法理論を比較哲学的・比較宗教学的に考察することによって、法理論のみではなく、両世界を規定している基本的な思惟構造の連続性と非連続性の双方が浮き彫りになることが想定される。それゆえ、トマスのラテン語原典およびアヴェロエスのアラビア語原典を精読し、更に、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語による二次文献を踏まえつつ哲学的な考察を深めることが、本研究の基本的な方法論となる。

4. 研究成果

上述のように、本研究は、ラテン・キリスト教世界とイスラーム世界における哲学的な知の在り方を比較思想的に考察するという、必要性が幅広く自覚されつつも未開拓な分野に、とりわけ法思想の比較哲学的考察という観点から取り組んだものである。

研究成果としては、ラテン・キリスト教世界に関しては、単著『トマス・アクィナスにおける人格（ペルソナ）の存在論』（知泉書館、2013年）を刊行したことが最大の成果である。同書の第四部「存在充足の原理としての自然法」においては、ラテン・キリスト教世界を代表する法理論家であるトマス・アクィナスの自然法論についての詳細な分析を遂行している。

イスラーム世界については、「イスラーム哲学：ラテン・キリスト教世界との交錯」、『西洋哲学史』第二巻、講談社選書メチエ、2011年）という論考を公表し、法思想を含めたイスラーム思想の全体をキリスト教思想に対

する影響関係に着目しながら記述するという斬新な試みを実現した。

さらに、“Yahya ibn Adi on Faith and Reason: A Structural Analysis of *The Reformation of Morals*” (*Parole de l’Orient*, Volume 37, 2012)や「ヨーロッパとイスラーム：文化の翻訳」(『西洋中世研究』第3号、2011年)においては、両世界の思想交流についての詳細な分析を行なった。

三年間の研究機関を通じて、単著・学会誌・商業誌など、様々な媒体にキリスト教思想とイスラーム思想の接点に関わる論考を発表し、充実した研究成果をあげることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 24 件)

(1) 山本芳久「信仰・理性・伝統：トマス・アキナスのユダヤ人観を手がかりに」、京都ユダヤ思想学会編『京都ユダヤ思想』第5号(2014年刊行予定)。査読あり。

(2) 山本芳久「トマス・アキナス『対異教徒大全』の意図と構造」、上智大学中世思想研究所編『中世における制度と知』所収、知泉書館、2014年刊行予定。査読なし。

(3) 山本芳久「『キリストの存在論』の構築へ向けて」、『春秋』558号(2014年5月)、13-15頁。査読なし。

(4) 山本芳久「トマス・アキナスの再発見：霊性の哲学」、『創文』13号(2014年4月)10-12頁。査読なし。

(5) 山本芳久「井筒俊彦とキリスト教：存在論的原理としての愛」、『三田文学』117号(2014年)、126-151頁。査読なし。

(6) 山本芳久「三大一神教の比較思想的 研究へ向けて：中世哲学の現代性」、『福音と世界』(2014年3月号)14-20頁。査読なし。

(7) 山本芳久「『神学大全』との出会い」、『本のひろば』673号(2014年2月)1頁。査読なし。

(8) 山本芳久「須賀敦子の霊性：日常性の神学」、『三田文学』116号(2014年)、98-123頁。査読なし。

(9) Yoshihisa Yamamoto, “Scholasticism in Early Modern Japan,” *Mediaevalia: Textos e Estudos* 32(2013), in press. 査

読あり。

(10) 山本芳久「トマス・アキナスのキリスト論：『肯定の哲学』の原点」、教父研究会編『パトリスティカ』第17号(2013年)131-154頁。査読あり。

(11) 山本芳久「偉人伝 トマス・アキナス」、『東京大学新聞』第3748号(2013年9月17日)3頁。査読なし。

(12) 山本芳久「トマス・アキナスの感情論：『肯定の哲学』の基礎づけ」、上智大学神学会編『カトリック研究』第82号(2013年)、35-90頁。査読あり。

(13) 山本芳久「信仰の知的性格について：トマス・アキナスの創造論を手がかりに」、上智大学中世思想研究所編『中世における信仰と知』所収、2013年、293-316頁。査読なし。

(14) 山本芳久「『出エジプト記の脱在論』としてのエヒエロギア」、上智大学共生学研究会編『共生学』No.7(2013年)、10-36頁。査読あり。

(15) 山本芳久「『神学大全』の完結性と未完結性」、『創文』8号(2013年3月)、創文社、7-9頁。査読なし。

(16) 山本芳久「倫理的規範の絶対性について：トマス、スコトゥス、ピトリア」、竹下賢・長谷川晃・酒匂一郎・河見誠編『法の理論』31号所収、成文堂、2012年、107-147頁。査読あり。

(17) 山本芳久「トマス・アキナスにおける感情の存在論：神に感情は存在するか」、哲学会編『哲学雑誌』第127巻第799号(2012年)74-97頁。査読あり。

(18) Yoshihisa Yamamoto, “Yahya ibn Adi on Faith and Reason: A Structural Analysis of *The Reformation of Morals*,” *Parole de l’Orient*, Volume 37 (2012), pp.453-474. 査読あり。

(19) 山本芳久「アヴェロエス『決定的論考』における『法』と『哲学』の調和」、東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻編『国際社会科学』第60輯(2011年3月)、21-38頁。査読なし。

(20) 山本芳久「トマス・アキナスとストア派倫理学」、中世哲学会編『中世思想研究』53号(2011年9月)172-176頁。査読あり。

(21) 山本芳久「真理の開示の形式としての『スコラ的方法』：トマス・アキナスの感

情論を手がかりに」、竹下政孝・山内志朗編『イスラーム哲学とキリスト教中世』第一巻所収、岩波書店、2011年、173-208頁。査読なし。

(22) 山本芳久「イスラーム哲学：ラテン・キリスト教世界との交錯」、神崎繁・熊野純彦・鈴木泉編『西洋哲学史』第二巻所収、講談社選書メチエ、2011年、211-280頁。査読なし。

(23) 山本芳久「ヨーロッパとイスラーム：文化の翻訳」、『西洋中世研究』第3号(2011年) 216-221頁。査読あり。

(24) Yoshihisa Yamamoto, "The Theory and Practice of Inculturation by Father Inoue Yoji: From Panentheism to *Namu Abba*," in Kevin Doak ed., *Xavier's Legacies: Catholicism in Modern Japanese Culture*, University of British Columbia Press, 2011, pp.145-168. 査読あり。

〔学会発表〕(計 7 件)

(1) 山本芳久「トマス・アキナス『対異教徒大全』の意図と構造」、ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所シンポジウム、早稲田大学(東京都新宿区) 2013年9月21日。

(2) 山本芳久「『理性』と『伝統』：トマス・アキナスのユダヤ人観を手がかりに」、京都ユダヤ思想学会、同志社大学(京都府京都市) 2013年6月22日。

(3) 山本芳久「トマス・アキナスのキリスト論：『最高善の自己伝達』としての『受肉』」、教父研究会、聖心女子大学(東京都渋谷区) 2012年12月22日。

(4) Yoshihisa Yamamoto, "Aquinas on the Pleasure of Love as *Complacentia Boni*," XIII International Congress of Medieval Philosophy, August 20, 2012, Freising, Germany.

(5) 山本芳久「近代日本における求道と霊性：井筒俊彦・吉満義彦・岩下壮一(特定質問)」、共生学研究会、上智大学(東京都千代田区) 2011年10月22日。

(6) 山本芳久「ポレート『単純な魂の鏡』について(特定質問)」、教父研究会、聖心女子大学(東京都渋谷区) 2011年9月24日。

(7) 山本芳久「『アヴェロエス』と『イブン・ルシュド』：ラテン・キリスト教世界におけるイスラーム哲学受容についての一考察」、西洋中世学会、京都大学(京都府京都市) 2011

年6月29日。

〔図書〕(計 1 件)

山本芳久『トマス・アキナスにおける人格(ペルソナ)の存在論』知泉書館、2013年、1-359頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 芳久(YAMAMOTO, Yoshihisa)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：50375599